

キリル・ペトレンコの印象

昨年9月の来日公演での記憶が新しい、バイエルン州立歌劇場のオーケストラ、バイエルン州立管弦楽団の第1コンサートマスター、ダヴィッド・シュルタイスを訪ね、シモーネ・ヤングが指揮するヤナーチェク《イエス・マリア》再演の練習に同席した。

——みな楽しそうに、励まし合って練習していたのが印象的でした。

「シモーネ・ヤングさんは客演指揮者なので、普通はコンサートマスターが団員との意思疎通に気をもんだりすることもあるのですが、彼女はもう何度もヤナーチェクを振りに来ているので、安心感があります。僕は、最初の先生がチェコ人で、奥さんにもピアノを習っていたので、チェコ語が飛び交う環境に慣れているせいか、チェコの音楽が大好きで、ヤナーチェクのおペラの中ではこの《イエス・マリア》がいちばん好きなので、なおさら楽しいです」

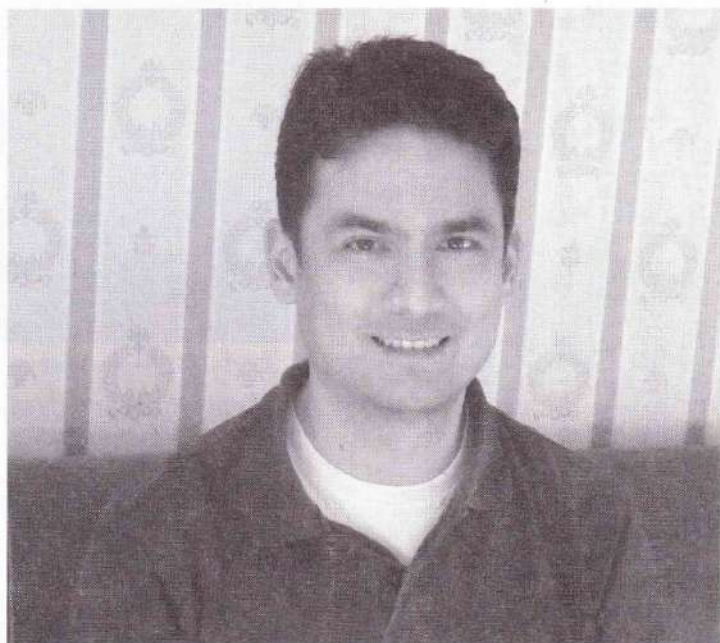
バイエルン州立管弦楽団といえば、あのキリル・ペトレンコが率いる、おそろしくいま世界でもっとも優れたオペラのオーケストラのひとつだ。昨年の来日ではペトレンコの音楽とともに、その演奏能力の卓越さでも話題となった。そのオーケストラに現在二人いる第1コンサートマスターから、ダヴィッド・シュルタイスをご紹介しよう。

——どうしてヴァイオリンを始めたのですか。

「3、4歳のころからヴァイオリンの音が好きでした。両親は音楽が好きで、母

とよく歌っていたので、音楽的素質に気が

付き、5歳で早期音楽教育の教室に通わせてくれたのです。その先生が、僕はヴァイオリンが合っているようだから



シュルタイスは、現在6カ月の育児休暇中だという ©中東生

ダヴィッド・シュルタイス David Schultheiß

1979年、ドイツのルードヴィヒスハーフェン生まれ。5歳からブラハス出身のフランツ・シコラについてヴァイオリンを始める。その後、フランクフルト音楽大学でエディット・パイネマンに師事し、ミュンヘン音楽大学でヴァイオリンだけでなく室内楽でも卒業、マスターを取得。エッセンのフォルクヴァング室内管弦楽団のコンサートマスターを1年半務めた後、ハイルブロン・ヴェルテンベルク室内管弦楽団のコンサートマスターを経て、2009年にバイエルン州立管弦楽団の第1コンサートマスターに就任。ラインラント＝プファルツ州立フィルハーモニー管弦楽団やミュンヘン放送管弦楽団にも客演する他、室内楽奏者としても活躍している。

と、そのチェコ人の先生を紹介してくれたのです。そのままずっと、別の選択肢も考えず、自然に音楽家になる道を進んでいました」

——コンサートマスターになろうと思ったのはなぜですか。

「どんなヴァイオリニストも、最初はソロを目指す時期がありますが、僕の場合は早くから室内オーケストラで弾き始め、フォルクヴァング室内管弦楽団のコンサートマスターに推薦されたのが始まりでした。ここは35歳で退団しなければならぬので、一年半後にハイルブロン・ヴェルテンベルク室内管弦楽団に移りました。その後、今のオーケストラでコンサートマスターの席が空いていると聞いて受けたら、幸運にも合格できて、2009年から務めています。そのころはちょうど、現音楽総監督のキリル・ペトレンコが客演に来ていて、とても印象に残っています」

——どんな印象ですか。

「とにかく緻密に準備をされるのです。初稽古までに彼は相当細かく、明確なヴィジョンを固めて来るのですが、それを練習中に正確に実現させようとするので、稽古に無駄な時間がなく、あつという間

連載



第45回

ダヴィッド・シュルタイス

(バイエルン州立管弦楽団第1コンサートマスター)

David Schultheiß, 1st Concertmaster of Bayerisches Staatsorchester

取材・文：中東生 Shinobu Naka

に終わる気がします。特に音楽総監督になつてからは、厳密志向なので、彼との練習には大変な集中力を要します。2013年、音楽総監督に就任した直後のR・シュトラウス《影のない女》では特に顕著でした。でも彼は、実はユーモアにあふれている性格なので、稽古中に気が緩み過ぎないように自分を戒めているようです。虚栄心がなく、音楽をそのまま表現することを第一に考えているので、僕にとっては音楽家の良い見本です。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団に移ってから、たびたび客演して欲しいです」

今年5度目の最優秀管弦楽団賞に

——オペラの専門誌「オーパングヴェルト」で、今年5度目の最優秀管弦楽団賞に選ばれています。ドイツ的なオーケストラの音色は外国人の音楽監督を通じてどのように変わってきましたか。

「おっしゃる通り、私たちのオーケストラにとつてはワーグナー、R・シュトラウス、モーツァルト

が3本柱ですが、今は他のレパートリーも増えています。前任のケント・ナガノはバランス感に優れ、特別なイメージを音楽に与えてきました。彼が特に追求したのは透明感で、彼が傾倒していたメシアンをはじめ、ラヴェルなどのフランス音楽を広げてくれました。ペトレンコはより正確さを要求し、強弱やリズムも精

緻になりました。二人とも外国人ですが、ドイツ音楽を勉強してきているので、国籍は関係ないと思います。両者の共通点は弱音の充実です」

コンサートマスターの仕事

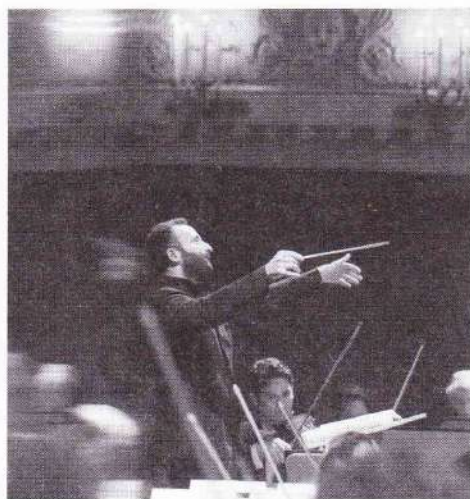
——コンサートマスターの仕事とはどんなものだと思いますか。

「コンサートマスターは指揮者の右腕的存在で、指揮者の意図を体で表現したり、大きな室内楽団のようなオーケストラ内部で、指揮者の振る棒だけでは伝わらないような事柄を伝達する役割を果たします。私たちの楽団は第一コンサートマスターの席が3つあるのですが、ここしばらくは二人で切り盛りしています。オーケストラ全体もほぼ二つのグループが交代で弾いているので、コンサートマスターも一緒に交代できて便利です。運弓を記すなどの楽譜の準備は、ほとんどの曲で、すでに整っているのですが、苦にはなりません。その他、ツァーなど、なじみのない音響のホールで弾く時は、

オペラという芸術がいかに大切かということがわかってきました

第2の指揮者として、適切な響きを探ります。音楽史上では、メンデルスゾーンあたりから現在の指揮者という存在が確立されたわけで、それ以前はコンサートマスターやチェンバロ奏者が指揮者を務めていたのです。

私のイメージでは、コンサートマスターは陸上選手のようなものです。多種目



キリル・ペトレンコ（中央）とは、バイエルン州立管弦楽団の第一コンサートマスターに就任したときの客演でとても印象に残っているとのこと。写真はペトレンコとの演奏。どちらもコンサートマスターはシュルタイス ©Wilfried Hosl

で高得点を出さなければならぬ陸上競技のように、特に歌劇場管弦楽団は、オペラ、バレエ、交響曲と複合的に優れていなければなりません。いくらアンネ・ゾフィー・ムターでもオペラは弾きませんものね（笑）」

いちばん嬉しい瞬間

——このオーケストラの長所はどこですか。

「昔からこの管弦楽団は、温かい音色がトレードマークでした。そこに、ペトレンコの追求する精緻さから、なめらかさが加わってきていると思います。そして柔軟性が特徴です。オーケストラ・ピットの、適度に乾いているけれど音質のよい音響もメリットです。歌劇場のオーケストラに入る前は、「オペラは長い」というイメージがありました。弾いてみる

と意外に楽で、オペラという芸術がいかに大切かということがわかってきました。もしもシンフォニー専門のオーケストラに入っていたら、その部分が自分に欠けていただろうと思うと、もうここを離れられません！

本拠地での活動が主なので、練習の合間に家に帰れるのも魅力で、これからも3歳の娘を幼稚園に迎えに行くのです。去年は出番が多く、冬は病気がちだったので、今は6カ月の育児休暇を取り、仕事を半分抑えています。おかげで練習時間も取れますし、これからは健康に留意して、質の高い音楽を追求していきたいです。

自分たちも満足できるような演奏の後にももう拍手は、いちばん嬉しい瞬間だからです。チェコのオペラや、これから初日を迎えるヴェルディ《オテロ》のよう、よいキャストが揃っているオペラを弾く時は「コンサートマスター冥利」に尽きます」